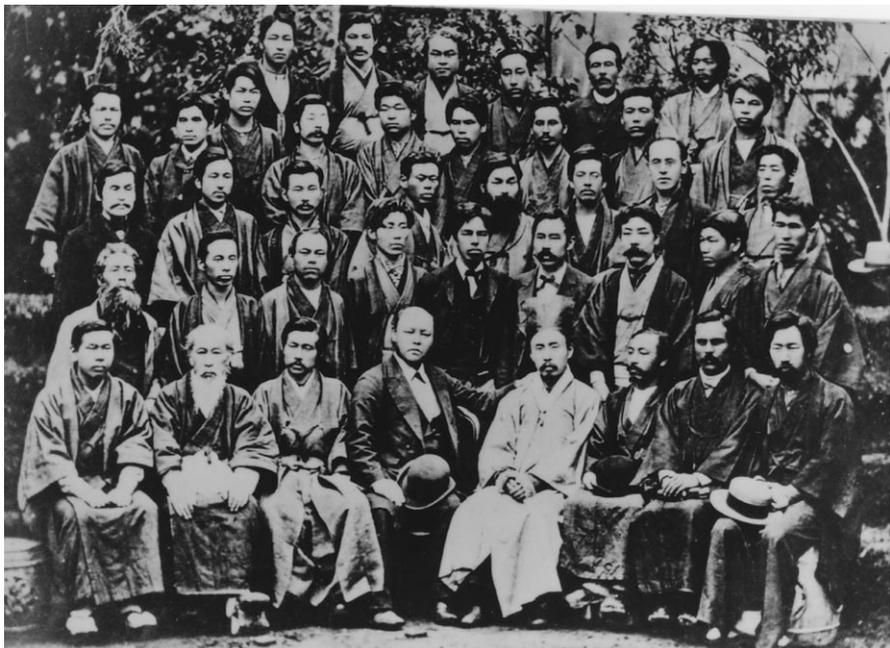


「同志社の完成は三百年」

新島襄と津田仙

本井 康博
(大学神学部教授)



第三回基督教徒大親睦会 (1883年5月、東京)

■ キリスト教徒大親睦会

天下を睥睨する男である。半身に構えて、中央に陣取る。第三回基督教徒大親睦会の集合写真(次ページ)である。

圧倒的な存在感を示すが、津田仙(1837~1908)である。内村鑑三は二列目中央、その隣りには新島襄(1843~1890)が立つ。

第一回の親睦会は、それより5年前(1878年)に東京で開催され、そこでも津田が議長を務めた。大親睦会は、初期のプロテスタント教界で占める彼のスターズを象徴的に示すイベントである。

津田は、1875年、J・ソーパーから洗礼を受け、築地明石町のメソジスト教会員となった。農業指導者、北海道開拓者、禁酒・社会運動家として、種々の社会活動や、雑誌発行などの啓蒙活動を展開し、その一方で、キリスト教教育者として学校も設立した。

■ 津田仙

新島襄との関連で言えば、ふたりの交流は、古い。年は、津田が6歳上である。

1857年ころ、江戸の手塚律蔵の塾で、共に蘭学を学んだ。1863年には、ふたりとも吉田寛輔、杉田廉卿らとキリスト教や聖書の学習会も催した。

津田と新島には、類似点が多い。関東(佐倉藩と安中藩)の下級武士の子で、早くにサムライから信徒へと転身した。共に、士族を捨て、平民となった。若くして海外生活(津田は視察・出張、新島は留学)を経験し、後半生は、民間人として在野で伝道やキリスト教教育に尽力した点も共通する。

にもかかわらず、津田の研究は、立ち遅れている。都田豊三郎『津田仙』(1972年)や高崎宗司『津田仙評伝』(草風社、2008年)が目につく程度である(本稿は、後者に負うところが大きい)。津田と新島襄の交流、となると、さらに貧弱である。拙稿「同志社と学農社」(『キリスト教社会問題研究』49、2000年12月)、ならびに同「新島襄と津田仙」(同前50、2001年)くらいである。

■ 岩倉使節団

新島は函館から密出国して渡米留学し

使節団に連れられて渡米した5人の女子留学生のひとりである。わずかに6歳の女兒をアメリカに送り出すとは、なんと残酷な父親か、との批判があった。

■ 津田梅子

渡米まもない梅子に会った翌日(3月8日)、新島はボストンのA・ハーディ夫妻にその消息を伝えた。(「」は本井)。

「昨日、「5人中の」ふたりに会いまして。ひとり「吉益亮子、14歳」は15歳くらい、もうひとり「津田梅子」はわずか8歳(数え歳)です。後者は、いまは母国で有名な官吏になっている私の旧友「津田仙」の次女です。

彼女は、私がこれまで見たことのないほど、可愛くて賢い少女です。彼女たちと実に楽しい会話をしたり、一緒に食事をしたりしました。ふたりは、受け入れられ家族の女性たちから話しかけられても、理解できません。

だから、私が会いに行くと、大喜びします。そして私に、実にたくさんの質問をたえずします。彼らは私には大変、友

たので、ニュー・イングランド時代、故国の家族とは自由に交信ができなかった。正規のパスポートを得るまで、日本側の窓口のひとつを津田が務めた。

29歳の大学院生(神学生)の時、津田の次女と出会う機会が新島に訪れた。梅子(1864~1929)である。1872年春、場所はワシントンであった。新島は少弁務使の森有礼の要請で、岩倉使節団に協力するために、アンダーヴァーから呼び出された。一方の梅子は、

好的で、恐れずに質問をします。というのも、質問をすることをためらうようでは、はなはだ残念だ、と言っておいたからです。

彼らに説教をすることはありません。ですが、楽しいやりかたで、倫理的原則を教えてください。だから、しょっちゅう訪ねているにもかかわらず、彼女らは私のことを大好き (lover of girls) とは見ないで、親切な教師である、と見てくれていると思います。と言うのも、私が話しかけるたびに日本式の礼を恭しくしてくれるからです。



津田梅子 7歳頃、ワシントンにて
(津田塾大学津田梅子資料室蔵)

彼らに少しでも役にたつことができ、私は本当に感謝で一杯です」。

■その後の梅子

その後の梅子と新島との交流は、深くはない。両者の帰国後も、そうである。ただ、一度、新島が伊藤博文を訪ねた際、同家で英語の家庭教師をしていた梅子と再会したことがある。

梅子が創設した女子英学塾 (現津田塾大学) と同志社との関係も薄い。梅子は (仙と同様に) ミッションや宣教師に対して批判的であつたからである。一方の

新島は、自身がミッション派遣の宣教師であつた。

例外は、元良勇次郎と上野栄三郎で、後述するように、ふたりは、津田家に近い。

同志社の創立以後は、今度は

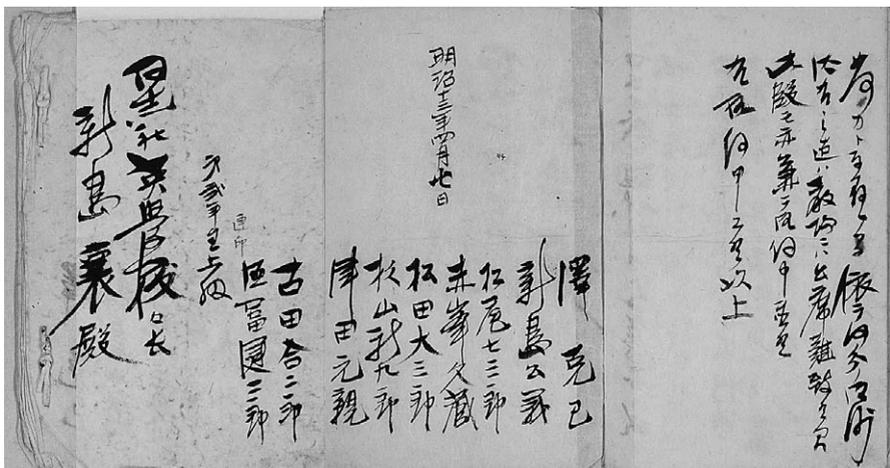


津田元親・次郎

梅子の弟 (元親と次郎) が、新島に接近する。津田自身、東京で男子校を開校したにもかかわらず、長男と次男を同志社へ送った。新島への信頼の深さが、窺える。



津田元親(右)・次郎(左)。同志社大学社史資料センター蔵。



「新島襄自責の杖事件」の引き金となつた「御伺書」(1880年4月)。津田元親の名がある。

長男の元親は、同志社では不平等の一人となつた。不満の爆発が、「自責の杖事件」(1880年)を生んだ。元親や徳富健次郎(蘆花)の2年上級組が引き起こした無届け欠席(スト)が、起因となつた。

事件のあと、不平等は、黒幕である5年生の徳富猪一郎(蘇峰)を始め、一斉退学を決議する。新島は蘇峰の翻意に尽力した。元親に対してもそうである。津田から託された子の中退させるわけにはいかなかった。

結局、退学を執行したのは、蘇峰始め、少数に止まつた。元親は同志社を卒業後、鉄道関連の仕事に就いた。渡米して鉄道について研究を進めたものの、帰国後に若死にした。

ついで、次男である。次郎の同志社生活は、よく分かつていない。卒業後は、アーモストにあるマサチューセッツ農科大学に留学した。新島の推薦か。W・S・クラーク

学長が、札幌農学校の教頭を兼務したことから、同校は北海道開拓のモデル校であつた。

帰国後は、学農社の業務を父親から引き継ぎ、「農業雑誌」の編集などに従事した。その後、カリフォルニアで実業に就くも、日米戦争で帰国を余儀なくされまもなく死去した。

■北海道にける期待

啓蒙家としての津田仙は、「農業雑誌」に続いて、1880年には「北海道開拓雑誌」を創刊した。日本のピューリタンたちは、ニュー・イングランドとの類似性から、総じて北海道には早くから親近感を抱いていた。津田と新島も、北海道を見る視座では、一致する。

雑誌の創刊は、北海道開拓長官、黒田清隆の発案で、資金(百三十円)も出た。印刷人は、安中出身の山田亨次(「農業雑誌」2代目編集者)である。彼は、安中藩で新島を教えた山田三川の息子で、同志社を中退している(拙稿「新島襄と山田三川・亨次」、『同志社談叢』20、2000年3月)。

この黒田が、岩倉使節団に5人の女子留学生を随行させたのも、将来、北海道に女学校を作るためだった、という（津田梅子「洋行の夢」、「読売新聞」1902年4月6日）。

津田は、『北海道開拓雑誌』で、本土から北海道への移住を熱心に奨励した。ビルグリム・ファーザーズによるアメリカ開拓をモデルとした。津田は、来日したW・S・クラークにも面会したり、雑誌で小伝などを紹介したりした。クラークは、新島の恩師でもある。新島は、津田以上にニュー・イングランド志向であった（拙著『ビーコンヒルの小怪』参照）。

■信徒集団による北海道開拓

津田のアピールに真つ先に反応したが、神戸の同志社系教派（会衆派）の信徒たちだった。彼らは、「赤心社」という団体を組織して、津田仙を顧問役にした。有志は、1881年に北海道の元浦河に入植し、元浦河教会を立ち上げる。新島裏もこれに共鳴し、赤心社の株主となった（『創設期の同志社』252頁）。同志社系の開拓組織としては、ほかに

■青山学院と群羊社

学農社の学校は、財政難から結局は廃校に追い込まれた。メソジスト派の信徒として、津田は青山学院の創立にも、大いに貢献した。前身校の耕教学舎で最初に教員となったのは、元良、和田正義、長田時行である。いずれも津田の息がかかり、しかも同志社出身者である。伝道の面でも、同様である。学農社スタッフの大半を同志社出身者が占めたので、京橋肴町に設置された学農社分校（銀座簿記夜学校）は、同志社の東京拠点となった。彼らの多くは、同志社系の会衆派信徒であったので、「群羊社」の名のもとに、独自に礼拝を開始し、会衆派教会の建設を夢見た。

■霊南坂教会と小崎弘道

そこへ、同志社第一回卒業生、小崎弘道が水沢（現奥州市）赴任の途上、東京に立ち寄った。群羊社の信徒たちは、小崎に牧師となるように懇請した。小崎が応諾した結果、生まれたのが、新肴町教会、今の霊南坂教会である。設立式では、

「インマヌエル村」がある。信徒たちが、今金（瀬棚郡今金町神丘）に1891年に入植し、インマヌエル教会（現・日本キリスト教団利別教会）を組織した。牧師には同志社出身の志方之善が就いた。妻の荻野吟子は、本郷教会（現弓町本郷教会）の信徒で、日本初の女医である。ちなみに、津田自身は、一時（1871年9月）北海道開拓使の嘱託になったその間、黒田清隆に頼み込んで、アメリカ留学中の新島を開拓使の役人にした。もちろん、新島には「政府の奴隷」になる気持ちなど、まったくなかった。おまけに、「ヤソ嫌い」で有名な黒田だから、この話は最初からミスマッチではなかったか。

■学農社

津田仙の働きの中で、同志社に最も近いのは、学農社である。同志社開校の2か月前（1875年9月）に、麻布に学農社農学校も開校された。キリスト教主義を採り、普通学や徳育（精神教育）も重視した。学内には日曜学校を設け、人物の養成に努めた。

津田は祈祷を受け持った。新島もわざわざ京都から駆けつけ、小崎の接手札を司った。

以後、小崎自身も、公私共に津田の指導を受ける。津田の養女ともいべき岩村千代を配偶者にした。この時、学農社分校で合同結婚式を挙げたのが、上野である。花嫁は津田の長女、琴であった。

小崎、上野のほかにも、津田の紹介で結婚した者に元良（旧姓杉田）がいる。相手は、小崎夫人と同級の元良米子であった。

■カタルパ

次に、農業指導者としての津田であるが、欧米品種の輸入や普及、さらには販売に力を入れた。洋食党の新島は、アスパラやブドウなどの西洋野菜を津田から斡旋してもらっている。

津田は、ほかにもアカシアや神樹（ニワウルシ）、ポプラなどの街路樹の普及にも力を入れた。カタルパもそうである。カタルパに関しては、熊本の徳富記念館のものが、有名である。記念館は「新島裏がその種をアメリカから取り寄せて、

このために津田は、新島に教員派遣を要請した。同志社初期の入学生、中島力造と上野栄三郎が、ついで元良勇次郎が赴任した。その後を窪田義衛、岡田松生、小崎弘道、山田享次らが続く。

時には、逆の動きもある。三輪振次郎は学農社から同志社に転入した。続いて、越後与板の三輪家からは、三輪源造始め10人近くが、同志社に入学する。新原俊秀のように、学農社が廃校された際に、同志社に転学するケースもあった。

中島、元良、上野らは、学農社からアメリカ留学の道を進む。斡旋したのは、いずれも津田である。中島と元良は、帰国後、帝大（東大）教授に就任する。

上野は財界で活躍する（吉崎雅俊『Who is Mr. Eizaburō Ueno?』DAC news, Vol.59, 2003, 9, 1）。

学農社のスタッフで異色なのは、内村鑑三である。動物学を教える傍ら、雑誌編集を手伝う。が、まもなく学農社が閉鎖された。彼には、農商務省、大日本水産会、同志社という三つの進路があった。彼が選んだのは、農商務省であった。

淇水と蘇峰（父子）に送った」と伝える。地元には、「新島がアメリカから持ち帰って、蘇峰に贈った」との伝承もある。当事者の蘇峰自身は、「新島先生が、其の種子数粒を書翰袋の中に入れ、淇水翁に米国から齎らし来りて贈られたもの」と回顧する（大越哲仁「熊本の富士とカタルパ」22頁、『民友』388、2012年4月）。

ただ、細かい点で、不審が残る。新島は、ポストン滞在中に、ニューヨーク州の種苗商（通販）にカタルパについて問い合わせをしている。だから、業者が熊本へ種か苗を直送したのかもしれない。

さらには、淇水（一敬）が、津田から取り寄せた可能性も残る。学農社は、カタルパの苗を一本二十銭ですでに売り出していた。徳富蘆花の『みみずのたはこと』によると、一敬は東京に出ると、ユーカーリ、アカシア、カタルパなどの苗を仕入れては、熊本に持ち帰っている。再渡米する新島に、現地調達を頼んだのは、淇水かもしれない。新島には、カタルパでなければならぬ理由は、何もないからである。

■勝海舟との面談

最後に津田の交流である。キリスト教界だけでなく、政財界でも津田の顔は、広がった。新島は津田の手蔓で、寺島宗則や伊藤博文ら、何人もの要人に接触してきた。なかでも、勝海舟である。新島は前後5回、海舟と面談している。そのほとんどに津田が同席した（詳しくは、拙著『新島襄の交遊』思文閣出版、2005年）。

とりわけ、第1回が大事である。「同志社の完成には二百年」と新島が答えた、と伝承されているからである。世間周知のこの挿話は、なぜか『勝海舟全集』にも『新島襄全集』にも出ない。最初にこれを記事にしたのは、石塚正治編『新島先生言行録』（125頁、福音社、1891年）であろう。ただし典拠は明示されていない。関係箇所を引く。

「二百年の後を期す〔新島〕先生の始めて勝伯に面するや、伯先ず問うて曰く。同志社は何年を期して成らしめんと欲するやと。先生答えて曰く、これ真神の事業なり、先ず二百年の後を期せざるを得

ざるべしと。ここにおいて、伯、大いに先生を信するに至りしという」。

■津田の証言では

ところが、この会談に立ち会った津田の証言は、異なる。新島の返事は、「凡そ三百年のつもり」である。念のために原文を引く。最初の勝・新島会談から二、三日後、津田が海舟を再訪すると、海舟は津田にこう語ったという。

新島は、「目下、我国に是非とも宗教を土台とする一大学校を設立する必要がある」と云ふ議論を滔滔と演べたて、是非とも勝に賛成して貰いたひと熱心を込めて、説いたそうだ。

そうすると、勝も動かされて、然らば、お前の希望の教育を日本全国に普及するには、一体、幾年位にて成就する積りかと、尋ねたら、新島君は直ちに答へて、凡そ三百年の積りなり、と答へた。そこで勝も、善し、夫れなら賛成をしてやると云ふたとの話であった（『原田助遺集』372頁、私家版、1971年）。

これは、津田が『警世』の記者に語った実話だといひ、原田は同文を著書に引

いている（原田助『信仰と理想』88頁、警醒社、1909年）。

■海舟の目は五百年スパン

二百年と三百年では、差は大きい。典拠の信憑性から言えば、現場にいた津田の証言を取るべきであろう。そのうえ、海舟には、二百年より三百年のほうが、受け入れやすかった。海舟は「日本を良くするには五百年くらいかかる。新島のようにあんなに急いでは命がもたぬ」と蘇峰に漏らしたという（『新島襄の交遊』231頁）。蘇峰の別の回想にも、こうある、海舟は新島に「あせるな、急ぐな」と、しばしば進言した、と。

小崎にも海舟は同じように言う。「伝道は急いではならぬ」と。小崎は、「新島先生に警告されたのも、之と同様であった」と回想する。「時間をかけてゆつくり」というのが、海舟の持論である。『氷川清話』にも、似たような発言が出る。

海舟の視線は、五百年スパンである。だからこそ、蘇峰は、自らの墓碑（多磨霊園）に「待五百年之後」と彫り込んだ。海舟の感化であろう。

■実は「三百年」では

以上のことから、新島の回答は「三百年」ではなかったか。とすれば、これまでの通説（常識）のように、「同志社の完成には二百年」ではなくなる。同志社英学校の創立（1875年）から数えて200年に当たる2075年は、単なる通過点に過ぎない。

これは重要なポイントである。この件に関して、私は今から7年前に問題提起を試してみた。「2005 同志社東京・春の集い」のガイドブックに、「同志社二百年」と題して寄せた短文がそれである。2005年3月29日に同志社校友会東京支部HPにも再掲されたので、現在もアクセス可能である。

『津田仙評伝』は、「およそ三百年のつもり」との答えが、海舟の信頼を得た、と明記する。これに対して、「お前の財産を残らず学校へ寄付してしまえ」と海舟に言われた福沢諭吉は、「いずれとくと勘考のうえ、御返事致すべし」と答えたという（38頁）。両者の対応の違いが、興味深い。

■「二百年後ノ世界ヲ待ツ」

「二百年」と言えば村上作夫である。新島の脳裏には彼の言葉が、過ぎつていったのかも知れない。村上は、同志社英学校で最初に漢文を教えた教員で、新島は校長として鄭重に迎えた（拙著『マイナーなればこそ—新島襄を語る（九）—』158頁以下、思文閣出版、2012年）。1885年7月、38歳で亡くなる直前に、7ページにわたる小冊子を刊行した。タイトルは「二百年後ノ世界ヲ待ツ」である。彼の墓碑銘（南禅寺天授庵）にもなっている。

同書は新島遺品庫に収蔵されている。新島はこれを丁寧読み、誤字を正したうえ、英語で冒頭（Keepi (保存せよ) と朱書きする。



津田仙の家族——前列左から梅子、琴子、初子(妻)、ふく(母)。後列左から元親、次郎、上野(琴子の夫)、仙(1886年9月4日、麻生本村町にて。津田梅子資料室蔵)。